

残酷なまでに暑かった夏をようやく乗り越えて、すっかり秋めいてきましたが、皆さんは如何お過ごしでしょうか。私の方はというと先日、岐阜県美術館でオープンしたばかりの「熊谷守一展」を拝見してまいりました。

当館からも木村定三コレクションの作品が多数出品されている関係で、初日の開場式にお邪魔してきたのです。熊谷守一といえば岐阜県にとっては、山本芳翠と並んで極めて重要な地元出身の洋画家。当然多数の関係者がつめかけた開場式は熱気に包まれ、古川館長の最初の挨拶からして気合が入っています。曰く10年以上前から、誰も見たことがないような、熊谷の展覧会をいつかはやりたいと考えており、今回それが実現した。出品点数が400点を超える展覧会は空前絶後である、とのこと。これを聞いたときに、何か運命めいたものを感じました。

というのも、熊谷の生誕100年を記念した展覧会図録の中で、木村定三氏は今後自分のコレクションはどこにも貸し出さない、故にこの展覧会が絶後の遺作展である、という主旨の言葉を書いているからです。それから20年以上を経て、木村定三コレクションが当館に寄贈され、今やその作品が多くの人目に触れることになったのは周知の通りです。その中でも80点以上(まさしく空前の規模!)の木村定三コレクションが貸し出された今回の展覧会が、時を超えて二つの「絶後」を結びつけたということに感慨もひとしおです。

また岐阜新聞社の杉山名誉会長は、2012年に岐阜県美術館のシャガール展が大成功を収めた頃から、2014年にも何か大きいことを、という思いで企画を進めてきた、と挨拶されていました。それでふと思い出したのが、シャガールも熊谷守一も同じく97歳でこの世を去った長寿の画家だったという事。同じ年に立て続けに長寿画家の展覧会に関わった偶然に、我ながら少しおかしくなりました。ちなみに梅原龍三郎と中川一政も同じく97歳まで生きたそうです。…ハッ!…ということは…!? (かようにしつこく長寿ネタを披露しているのは単なるトリビアではなく、次回のコレクション展の「夭折の画家」特集へのカウンター的ステマだったりします)。

出席者の中には県議会の議長もいらっしゃって、この展覧会をもって岐阜の文化振興に寄与したい旨の言葉もありました。熊谷守一の父親、孫六郎がかつて同じ県議会議長を務めたことを思えば、この言葉もまた重みを増してくるように思いました。などと、普段はオープニングにうかがっても聞き流している関係者のご挨拶ですが（ちょっとちょっと！）、展覧会をお手伝いをさせて頂いたこともあって今回は聞き入ってしまいました。



熊谷守一のご息女、熊谷榎さんもお出席。

さてテープカットが終わり、会場へ足を進めようと思いますが、人が多すぎて中に入れません。なのでまずは、所蔵品展示から先に見始めます。こちらは先頃《裸婦》が重要文化財に指定されたばかりの山本芳翠の絵が多数展示され、さながら特集展示のよう。他にも藤島武二、長原孝太郎、青木繁、藤田嗣治など、熊谷と関係の深い画家の作品が並んでいました。



展示室入ってすぐの初期作品コーナー。

ようやく熊谷守一展の会場に入ると、いきなり木村定三コレクションの《朝の日輪》がお出迎え。おお。その後も要所要所で、木村定三コレクションの名品が展覧会を彩っていて誇らしくなるとともに、自分の中で確立させた熊谷守一像に従って、厳格に作品を収集していった木村定三氏の目利きに改めて恐れ入る思いでした。また、それにも増して《母の像》や《熊谷萬病中図》、《ヤキバノカエリ》など、主要な所蔵品を軸にして熊谷守一の死生観に迫っていく展示構成には、作家への深い理解と収集活動が一体となった岐阜県美術館の実力を感じずにはいられませんでした。



当館木村定三コレクションの猫は下絵(トレース紙)と一緒に。

作品数の充実は、会場で様々な気づきをもたらされることを意味します。今回の展示では、1930年代に描かれた様々な裸婦像がグリッド状に配置されたコーナーや、1960年前後に描かれた裸婦がまとめられた壁面などに、特に目を見張りました。前者では同じ裸婦というモチーフながら、絵具によるドローイングのように、異なる表現方法を試行錯誤した跡がありありと見て取れます。また後者では、グリーンとオレンジという色の対比を用いた背景の平面構成に、この時期の画家の関心があることが伝わってきます。これらはそれぞれの時代や主題ごとの作品を、点ではなく面で見せることによって浮かび上がってくる成果と言えるでしょう。

また木村定三コレクション以外では、来年秋に画家の故郷にオープンする予定の、熊谷守一付知記念館準備室が所蔵する作品が出品されていました。開館前の今のタイミングだからこそ、集めることの可能だった出品内容といえると思います。単純だけれどもそれだけに奥が深く、一点一点の鑑賞に時間のかかる熊谷作品。それがこれだけ集められているのですから、どうか十分な時間を予定に入れておくことをおすすめします。なんといい

ても他のお客さんから、「えっ、まだあるのー？」という驚きの(あるいは歓喜の)声が聞こえてきたくらいですから！！

(TI)